

○佐藤悦子* 小林茂雄**

(*上越教育大, **共立女大)

〈目的〉 衣服着脱の動作特性を明らかにするための基礎的資料を得る目的から、健常者の着脱動作を取り上げ、主にボトム服について動作実験を行い、動作過程のパターン化、所要時間および着用感との関連性について検討してきた。本報ではブラウスの明きを取り上げ、明き形態の違いによる着脱動作の過程を比較検討した。また、着脱しやすさの評価内容を検討するために官能評価を行った。

〈方法〉 被験者は健康な女子学生33名とした。実験衣は同一形態ブラウスで明きの異なる4タイプ（ボタンかけ：前明きA, B, 前立てC, 後ろ明きD）を作製し、着脱動作を行った。動作測定は、人工気候室（温度23～25℃、湿度50%RH）で行い、ビデオ撮影し動作過程を観察した。動作終了後、官能評価（SD法20項目）によって4タイプの着用感とイメージを評価した。動作の総合評価として“着脱しやすい”を順位法で行った。動作を着衣と脱衣に分け、さらに動作過程を主動作と補助動作の構成単位として検討した。

〈結果〉 1)動作の所要時間は、4タイプともに着衣>脱衣であり、D>B, A>Cであった。2)打ち合わせの異なるAとBでは、着衣時の補助動作において所要時間に差が見られた。3)官能評価において、4タイプは、AとC, BとD間に類似傾向が見られ、AC間では『着慣れた』『落ち着きのよい』, BD間では『ぎこちない』『実用的な』等で評価が分かれた。“着脱しやすい”の順位は、A, C, B, Dの順であった。4)動作過程は、ボトム服に比して数種のパターンに分かれ、特に後ろ明きは、多様な着方が見られた。